平泉への旅

土　屋　博　映

１、はじめに

2011年２月、僕に一通の依頼書が舞い込んだ。それは、「北茨城市生涯研修センター」からの『おくのほそ道』の講演についての依頼だった。６月から９月の間に10回、講演というよりは講義である。会場は水戸よりはるか北、日立よりやや北に位置する「十王」という場所にある。僕の興味を引いたのは、「野口雨情」の生誕地の近くということである。10回も行けば、記念館等にいく機会もあるだろうし、有名な「鵜の岬の国民宿舎」に泊まれるかもしれない（ただし、この国民宿舎の人気は非常に高く予約開始30分以内にすべてうまるというすぐれものである）し、などとあれこれ考え引き受けることとなった。もちろん学長の許可もとり、業務に支障のない日曜日を講演（講義）日にあてることとした。

ところが、直後にあの３月11日の大震災が起こったのである。北茨城市は被災地である。メールの記録を見ると、３月12日に僕はセンターの担当のＹさんに安否を問うている。幸いにも津波の被害はあったが、大被害ではなく、研修センターも何とかもちこたえ、講演依頼もそのまま活きているということであった。安堵するとともに、こうなったら何としてでも行かねば、行ってできることはしなければ、という思いで６月が来るのを待った。

２、講義

６月５日（日）最初の講義が開始。上野駅７時発の特急「スーパーひたち」に乗り込む。晴れていたが、僕の心には情景は暗いものにしか見えなかった。「ひたち」が北へ向かうにつれ、屋根瓦のない家がどんどん目立ってくる。一見人々が平常に生活しているのが不思議に思えるくらいだった。遠くからではわからないのだが、駅などでよく眼をこらすと、建物の損壊が随所に見えるのだった。

センターで講師紹介の直前、また強い揺れが来たのを覚えている。この揺れは講演中、ほとんどどこかで感じた。そのたびに被災地の方の心中を思いやった。空回りしようと、とにかく熱意だけは抱き、生徒さんたち（大部分60歳以上）に向かい合おうと決意した。

10回に及ぶ講義で、受講生の方々の熱心さ、そして非常に反応がよいことが記憶に残る。感動が涙を生むこともしばしば。みなさん本当に涙もろくなっていた。そして、忘れられないのは、担当のＹさんが毎回必ずおみやげのお弁当をつけてくれたことだ。日立駅で特急に乗りかえるとすぐにビール・酒をのみながらのお弁当、その帰りの特急での一人宴会の時間が楽しみでたまらなくなった。

そして５回ほど経過したころ、後期（10月以降）にも講義を追加（５回分）してくれないかという依頼があった。僕は快くひきうけた。断る理由は何もない。望むところである。しかも１回は「現地研修」をいれるということであった。

現地研修の候補として、最初「山寺」があがった。コンパクトで団体行動がしやすい、という僕の発想だったが、結局世界遺産に認定された「平泉」に決定した。考えてみれば『おくのほそ

道』のクライマックスは平泉だし、世界遺産登録も魅力的である。もちろん僕も即賛成した。決行は11月24日（木）と決めた。木曜日は僕の研修日だし、平日のほうがすいているし、その頃なら紅葉の季節もすぎているので、観光客も少ないだろうという僕の判断からだ。

3、配布資料

次に当日受講生に渡した配布資料をあげる。

世界遺産・平泉（2011年世界遺産登録）　現地研修資料
◎平和への願いを託した平泉文化
自然と融合した寺院建築と庭園、さらにその思想的背景となった日本独自の文化。
★現世に出現した仏の国
正式名称「平泉―仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」
中尊寺・毛越寺・観自在王院跡・無量光院跡・金鶏山（以上５つ）
①平泉の寺院と浄土庭園→大陸伝来の仏教や作庭の概念が日本の自然信仰との融合発展。②浄土庭園の独自性。
★武家が築いた最初の都・平泉
平安後期（1100年頃）、京都藤原氏の流れを汲む藤原清衡が拠点を構えた。奥州の金、東北・北海道方面の物産による経済力で東北地方の支配者として、独立的な都市を築く。
平泉は、武家最初の都（鎌倉・江戸の先がけ）。
平泉は、経済的・文化的にも京都を跳び越して直接大陸と往来。『東方見聞録』の「黄金の国ジパング」はまさに平泉のこと。
★黄金は浄土の色
金色堂は本来初代清衡の臨終の場で私的な阿弥陀堂。二代基衡、三代秀衡もあやかり、平泉の守護神となった。
★仏国土を再現する都市づくり
中尊寺大伽藍（初代清衡）・毛越寺（二代基衡）・無量光院（三代秀衡）
藤原三代は徹底して、平泉に仏国土を再現する都市づくりを目指した。その都市の形が鎌倉・江戸・仙台等に継承されている。
★仏国土を支える農村遺跡
骨寺村荘園遺跡（現・一関市）→仏教色に染め上げられた日本の農村の原風景が12世紀にできたことを物語る。現在も当時の絵図の姿をとどめている（追加登録を目指す）。
★中世の王権と公共事業
「奥大道」（東北高速道路と重なるルート）→清衡が作り、北方世界の物産を平泉に集め、京都・大陸との交易を目指した。道路を大事にさせるため、100メートルごとに供養塔を建てた。藤原三代は平泉と奥州全体を仏の国にしたいという意思を持っていた。
★平泉発、平和のメッセージ
清衡は数十年の戦乱をくぐりぬけて平泉に拠点を築いた。妻子が殺され、自分も大勢の人を殺したという体験から、仏教の平和・平等思想に指針を見出していった。
「この鐘の音が三千世界に響き渡るたびに、これまで命を奪われた生きとし生けるもの、特に、たび重なる戦争で死んだ敵も味方も、すべての人たちの恨みを持った魂が洗い清められ、極楽へ往生できますように」（「中尊寺供養願文」清衡の落成式挨拶文）

（入間田宣夫東北芸術工科大学教授「NHK ラジオ深夜便」11年８月19日放送による）

４、平泉の旅へ

『おくのほそ道』のよさは、作者芭蕉が、自らの足で、370万歩、150日、2400キロをたどったこと、そして、単なる空間の旅ではなく、時間を越えた旅、「時をかける芭蕉」であったということに尽きるであろう。彼は自然の美しさはもちろん感じたのだが、その自然の中に生きる、あるいは生きた人間・文化にも心を寄せていた。彼は悲劇の英雄が好きだった。悲劇の英雄にこそ、人間の真実が、無常という真実が、こめられていると考えたのだ。彼が唯一涙を落としてやまなかったのが、平泉である。平泉の高館にある義経堂の前で彼は号泣する。それは単に義経を偲んだだけではなく、義経と、その家来、さらに平泉という町から、人間というもののはかなさを感じ取ったからに相違ない。

『おくのほそ道』の句というより、芭蕉の句というより、俳諧の発句（俳句）の中で、一句あげろと言われれば、日本人のほとんどが、

「夏草や　兵どもが　夢の跡」

をあげることだろう。まさに彼の思いが、深くこめられた、渾身の一句といってよい。それこそが、芭蕉にとっての平泉なのだ。

我々が平泉へと向かったのも、芭蕉さんのお導き、そうとりたい。

さて、当日「十王」朝６時半の出発ということで、当然僕は十王に泊まらなくてはならない。Y さんは僕のあこがれの「国民宿舎鵜の岬」を宿にとってくれた。とれたのはまことに幸運。震災後、やや人気薄となったためだった。それでも当日宿舎は満杯。宴会場で一人きりなのは僕だけ。宿は日の出の美しい大浴場で有名なのだが、６時半出発なので、日の出は見ることができない。だが、一泊は満喫した。料理もおいしく、酒もすすんだ。

出発直前、また大きな揺れがあった。それは僕の気持ちをより引き締めさせた。

５、平泉とは

バスは予定通り、午前６時半、十王の研修センター近くの駐車場から出発。70名の参加ということでバス２台。僕は行きが１号車、帰りが２号車と指示された。まずは１号車から出発。朝の挨拶は「ごきげんよう」である。

さて、講師として同行するのであるから、何かしなくてはならない、それで前述の資料を作成したわけである。

「世界遺産・平泉（2011年世界遺産登録）　現地研修資料」を配布し、20分ほどかけて解説した。これは NHK ラジオの「ラジオ深夜便」11月号の、入間田宣夫さん（東北芸術工科大学教授）の「世界遺産・平泉を読み解く」（2011年８月19日放送）の記事を大いに参考にさせていただいた。

まずは「◎平和への願いを託した平泉文化」というのがポイントである。「平和への願い」というのは、現代、世界的に見ても、もちろん日本においても、最重要事項である。今から900年も前に、そういう願いでもって平泉文化は栄えた、これはある意味驚くべき文化といってよい。

さらに「自然と融合した寺院建築と庭園、さらにその思想的背景となった日本独自の文化。」というのが具体的なポイントとなる。自然と一体化しているという点、さらには模倣ではなく、日本独特の個性があるという点である。

以上が、世界遺産として評価されたポイントとなる。

「世界遺産平泉」は、「★現世に出現した仏の国」と考えられる。ところで、「正式名称」は、「平

泉―仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」というのである。「仏国土（浄土）を表す」「建築・庭園」及び「考古学的遺跡群」と分析できる。その「群」とは「中尊寺・毛越寺・観自在王院跡・無量光院跡・金鶏山（以上５つ）」の５つである。

それらについては、先にも多少触れたが、「①平泉の寺院と浄土庭園」については、「大陸伝来の仏教や作庭の概念が日本の自然信仰との融合発展」があり、さらに「②浄土庭園の独自性。」があると認められる。大陸の仏教・文化を受け入れ、それを日本の自然信仰と融合発展させただけでなく、「浄土庭園」には平泉独自の個性が存在するというのである。

また、平泉は、「★武家が築いた最初の都・平泉」ということができる。「平安後期(1100年頃)、京都藤原氏の流れを汲む藤原清衡が拠点を構えた。」わけである。「奥州の金、東北・北海道方面の物産による経済力で東北地方の支配者として、独立的な都市を築く。」ということだ。「経済力」「独立的な都市」がキーワード。言うならば平泉は、単なる都市というよりは、「平泉国」と呼んだほうがよいのだ。さらに強調すれば、「平泉は、武家最初の都（鎌倉・江戸の先がけ)。」ということになる。武家の都として、まず「平泉」がおこり、「鎌倉・江戸」が追随した、という捉え方である。「平泉」が主で、「鎌倉・江戸」が従なのだ。

「平泉は、経済的・文化的にも京都を跳び越して直接大陸と往来。『東方見聞録』の「黄金の国ジパング」はまさに平泉のこと。」ということである。「黄金の国ジパング」は恐らく、中尊寺「金色堂」のことであったのだろう。日本が大々的に西欧に知らされたのは、このマルコポーロの記事による。「ジパング」が日本を示す「ジャパン」のもととなったのもここからである。

さて「★黄金は浄土の色」であるが、「黄金」というと権力の象徴のごとく思われるが、実は浄土（仏土）の色をあらわしている。「金色堂は本来初代清衡の臨終の場で私的な阿弥陀堂。二代基衡、三代秀衡もあやかり、平泉の守護神となった。」ということ。本来「私的な阿弥陀堂」であった。清衡は仏道への敬虔な気持ちから「金色堂」を作ったのだ。

初代清衡の意向は、「★仏国土を再現する都市づくり」ということであった。「仏国土を再現」がキーワード。そのためには寺院がなくてはならず、それが三代の、「中尊寺大伽藍(初代清衡)・毛越寺（二代基衡)・無量光院（三代秀衡)」となって顕現されたのである。「藤原三代は徹底して、平泉に仏国土を再現する都市づくりを目指した。その都市の形が鎌倉・江戸・仙台等に継承されている。」ということ。初代清衡の意向は、二代基衡、三代秀衡と確実に受けつがれ、「仏国土を再現する都市づくり」が実現化されいったのである。そして、その都市の形が、鎌倉・江戸・仙台といった都市に受け継がれたというのが、本来の流れである。それだけ「平泉国」の存在は重く、影響力があったというべきである。

入間田氏は、「★仏国土を支える農村遺跡」も価値があると述べている。それは「骨寺村（ほねでらむら）荘園遺跡（現・一関市)」と呼ばれ、「仏教色に染め上げられた日本の農村の原風景が12世紀にできたことを物語る。現在も当時の絵図の姿をとどめている（追加登録を目指す)。」ということだ。「日本の農村の原風景」と「現在も当時の絵図の姿をとどめ」がポイントで、資料にあるごとく、これは世界遺産の追加登録を目指しているのだ。

「★中世の王権と公共事業」についてだが、清衡は「王権」と「公共事業」の一石二鳥を考えていたということになる。「奥大道（おくだいどう)」（東北高速道路と重なるルート）は、「清衡が作り、北方世界の物産を平泉に集め、京都・大陸との公益を目指した。」もの。平泉を中心とし、北は青森から南は福島の白河の関まで一気につなげた、というまさに大工事の末、成立した大幹線道路である。清衡はこの「道路を大事にさせるため、100メートルごとに供養塔を建てた。」という。まさに道路も仏の道なのであった。「藤原三代は平泉と奥州全体を仏の国にしたいとい

う意思を持っていた。」、それは道路にも如実に顕れている。まさに仏の道で東北地方を一体化しようとしたとも言える。ちなみに芭蕉が自らの作品を「おくのほそ道」と名づけたのは、「奥大道」を意識していたと考えておかしくない。

入間田氏は、最後に「★平泉発、平和のメッセージ」とまとめた。「清衡は数十年の戦乱をくぐりぬけて平泉に拠点を築いた。妻子が殺され、自分も大勢の人を殺したという体験から、仏教の平和・平等思想に指針を見出していった。」という。悲惨な戦争の経験は彼を平和主義者へと導いた。彼の中尊寺本堂供養の「願文」には次のような内容が記されている。「この鐘の音が三千世界に響き渡るたびに、これまで命を奪われた生きとし生けるもの、特に、たび重なる戦争で死んだ敵も味方も、すべての人たちの恨みを持った魂が洗い清められ、極楽へ往生できますように」(「中尊寺供養願文」清衡の落成式挨拶文) と。

僕は「敵も味方も」というところに清衡の苦難の日々と悲しみと、そして平和を祈る優しさが感じられてならない。

以上「(入間田宣夫東北芸術工科大学教授「NHK ラジオ深夜便」11年 8 月19日放送による)」をもとに解説した。

6、平泉

十王を出発した 2 台のバスは、常磐道を北へ。本来なら、そのまま北進するのだろうが、福島県内の常磐道は、原発の影響で通行不可。そこで途中で東北道にのりかえ、一路北をめざす。この時間が半端じゃない。PA の休憩時間は10分程度、それを 4 回ほどとるのみで、平泉に到着したのは11時過ぎ、実に十王を出てから 5 時間経過。後で聞いたのだが、現地研修はどんなに遠くても日帰りバス旅行が慣例となっているそうだ。

天候があやぶまれたが、道路には水溜りがあるが、首尾よく到着時点で晴天にかわったのはありがたかった。しかし、やはり寒い。厚着は正解だった。まずは「毛通寺」の庭園。とにかく美しい、の一言。しかも今年の陽気は紅葉をまだ残していてくれた。寺院があればもっとすばらしかったろうに。寺院は山火事で失ったとのこと。実際平泉は戦火にはあっていないのである。惜しいことをしたものだ。その後中尊寺拝観の前に昼食。精進料理であるのに感激。そしてガイドさんが加わり、一行と中尊寺に行く登りの道すがら、どうも見覚えがあると思ったら、平成17年、今回の旅より 6 年前、「おくのほそ道」ツアーの講師としてきたことがあった。何度見ても「金色堂」はすばらしい。前回見ているので、今回は冷静に見て取ることができた。帰りはくだり、先にもどり、珈琲を一杯。このバスの旅は誰も酒を飲まない。「現地研修」の「研修」がみなさんを抑えているのだろうか。酒好きな僕は抜け駆けをして一杯飲もうと思ったのだが、やはり珈琲にした。

帰路もただひたすら戻るのみ。途中何箇所かで工事渋滞。そして何とか暗闇の十王に午後 7 時半無事到着した。その後一人になり、痛飲したのはいうまでもない。

7、旅を終えて

平泉現地研修の旅は「おくのほそ道」講演の14回目にあたる。そのわずか 3 日後の11月27日(日)が、15回目、最終回となった。最終回、取り上げた事項をいくつか記す。

一、名場面ベスト10

「名場面」を僕の独断と偏見で選んでみた。

①平泉　②松島　③象潟　④序章　⑤旅立　⑥立石寺

⑦白川の関　⑧一振（市振）　⑨大垣　⑩尾花沢　等外　尿前の関　最上川

次に「名句」も僕の独断と偏見で選んでみた。

二、名句ベスト10

①夏草や兵どもが夢の跡（平泉）

②閑さや岩にしみ入蝉の声（立石寺）

③荒海や佐渡によこたふ天河（越後路）

④五月雨の降のこしてや光堂（平泉）

⑤五月雨をあつめて早し最上川（最上川）

⑥象潟や雨に西施がねぶの花（象潟）

⑦行く春や鳥啼魚の目は泪（旅立）

⑧蛤のふたみにわかれ行秋ぞ（大垣）

⑨一家に遊女もねたり萩と月（一振）

⑩暑き日を海に入れたり最上川（最上川）

等外

蚤虱馬の尿する枕もと（尿前の関）

行く行くは誰が肌ふれむ紅粉の花（尾花沢・選外）

曽良

卯の花をかざしに関の晴着かな（白川の関・曽良）

行き行きてたふれ伏とも萩の原（山中・曽良）

次に、最後講義のまとめを前文そのまま掲げる。前述の解説と重複する部分もある。

三、平泉現地研修

12世紀の100年間、仏教都市・国際都市（北緯39度に位置し、南は北緯37度、北は北緯41度まで、地球の４度分の勢力をもった）として栄え、そして時代を駆け抜け、滅びて行った平泉国の価値を再認識しよう。清衡の偉大さ、そしてそれを受け継いだ基衡・秀衡のすぐれ者。そこに絡んだ悲劇のヒーロー義経。奥大道により、南北の陸のルート、北上川・最上川により、東西の水のルート。経済的にも京都をはるかにしのぐ国だった。日本の古きよきものを持ち続け、仏教による平和を願った藤原三代、平泉は、一つの仏教国として、日本史に燦然と輝くものだった。マルコポーロはまさに「金色堂」から「黄金の国ジパング」と記したのだ。

芭蕉は単に義経に対し「夏草や兵どもが夢の跡」とよんだのではない。背景にある平泉国の盛衰、そこに見る人生の無常に対し、感涙したのだ。義経は泪の契機であり、あふれだしたのは藤原三代の盛衰である。名句は人間のはかなさにいい知れぬあわれさを感じてよんだものだ。芭蕉の人生はまさに浮き沈み。義経と藤原三代に、人間としての自分を重ね合わせてもいる。

「おくのほそ道」という題は「奥大道」を意識していたとも考えられる。

※今度は是非高館で腰をおろし、眼下の北上川と平泉をじっくり味わってください。

８、後記

僕はかねてから野口雨情の大ファンで、舟木和夫演じる「野口雨情」を見にいったこともある。「シャボン玉」「赤い靴」をはじめ、その魅力は大変なものだ。Ｙさんにそれを伝えると、「うちの研修センター長は雨情の孫です」ということで大変驚き、大変感激したものだ。そのセンター長「野口不二子さん」は大変多忙な方。その中、一度だけ無理にお願いして時間を作っていただ

いた。雨情の生家、記念館、「波浮の港」の発想のもととなった港など案内していただいた。大地震の時、ちょうど生家にいたので、津波を予想し、雨情の重要資料を背負い、一人で、丘の上まで何度も往復し、守ったという。津波は雨情の生家の畳までおしよせた。不二子さんの機転で雨情の資料は守られたのである。その後、担当者を含めて懇親会を開かせていただいた。雨情のさまざまなエピソードを雨情のお孫さんから直接耳に出来るなど、望外の光栄であった。

雨情の人柄は「波浮の港」の詩の逸話からもうかがえる。雨情の生家の近くには前述の「鵜の岬」があるように「鵜」がいるのだが、実際の「波浮の港」には「鵜」は生息しない。また「夕焼け小焼け」とあるが、実際の「波浮の港」からは「夕焼け」は見られない。その点をつかれると、「いやー想像で書いたもんでやんすから、間違ってしまったでやんす、申し訳ないことをしたでやんす」とか頭をかきかきこたえたそうな。

機会があれば、また十王に、鵜の岬国民宿舎に泊まりたい。そしてセンター長はじめ市職員のみなさん、そして受講生のみなさんにあいたいと心より思う。そして、あのお弁当こそ、心より再度食したいと思う。

十王のみなさん、お元気で、また会いましょう。つっちーより愛をこめて。

ごきげんよう。